

小説教材の読みにおける〈作者側の読者〉と 〈物語読者〉の対話・葛藤(2)

— フラジャイルなテキストによる読者側の葛藤の喚起 —

山元隆春

(2003年9月30日受理)

Dialogical Relationships between “the Authorial Reader” and “the Narrative Reader” in Reading of Fiction (2)
: Engendering Reader’s Conflicts by the Rhetoric of Fragile Texts

Takaharu Yamamoto

In this Paper, Peter Rabinowitz and Michael Smith’s *Authorizing Readers* (1997) was considered as a fundamental work for teaching of fictional texts. Rabinowitz and Smith emphasized the dialogical relationships between “the authorial reader” and “the narrative reader” in reading acts of a practical reader. Rabinowitz argued that if readers failed to playing either “the authorial reader” or “the narrative reader”, they would take any misreadings such that what he called “Quixotic” or “Emma-Bovary” or “Blimperism.” On the other hand, Smith argued if readers wouldn’t play as “the narrative reader” but as “the authorial reader,” they couldn’t get the point of the story, and couldn’t respect not only characters and narrator but also the author of the story. Rabinowitz also emphasized the rhetoric of fragile texts, and suggested that we teachers of fictions must resist what he called “the Doctrine of the Macho Text,” and consider the fragilities of fictional texts for comprehending any other reader’s comprehension. In conclusion, some suggestions for reconstructioning teaching and learning of fictions were suggested as follows; 1)For respect to the author, we must recognize the effectiveness of “the authorial reader” concept in reading act.; 2)For respect to the narrators and the fictional characters, we must develop literary reading process founded by the triadic relations with practical reader, “the authorial reader” and “the narrative reader”; 3)For respect any other peer-readers, we should develop teaching practices holding perspectives to fragilities of fictional texts.

Key words: reader, authorial reader, narrative reader, fragility, teaching of literature

キーワード：読者，作者側の読者，物語読者，フラジリティ，文学教育

本稿は、本紀要前巻に発表した「小説教材の読みにおける〈作者側の読者〉と〈物語読者〉の対話・葛藤(1)」(山元, 2002)を承け、考察のまとめを行うものである。

6. フラジャイルなテキストによる 読者側の価値葛藤の喚起

だが、ラビノヴィッツらの言う〈作者側の読者〉の立場にあるかないかということ、いったい誰が決定するのだろうか。あるいは〈作者側の読者〉とは複数形なのか単数形なのか、もしくは定冠詞を冠されるような絶対的な存在なのだろうか。ラビノヴィッツが最後に扱っているのはこの問題である。

物語理論の展開の教える読みの問題を、合理的につきつめていった末にラビノヴィッツらの主張は生み出されているのだが、大きな問題点はその理論の内容よりも、むしろ理論的前提が本当に大丈夫なのかと疑うことなのである。これは、物語論だけの問題ではなく、種々の文学教育論においても同様に大切な論点になるはずである。〈読者〉が大切だと言いながら、その〈読者〉は結局その理論家の都合のよい読者でありはしないだろうか。もしくは、ある特定のテキストの読みだけに通用するような読者である、ということはないだろうか。

すなわち〈作者側の読み〉が問題となってしまうような環境も存在するのではないかという問いをラビノヴィッツは検討しようとする。彼が問題にするのは、『読者に権限をもたす』第6章でのマイケル・スミスの論述を一貫している〈共有する (sharing)〉というイメージである。

マイケルは〈くしもクラスのメンバー全員が物語読者のメンバーとして自分達が経験したことを共有すれば、生徒たちは恩恵をこうむる〉と信じている。が、これは常に本当のことだろうか？ 実際読者としての経験を常に共有することができるのだろうか？ そして共有すべきなのであるか？ 私見によれば、その答えはノーである。私たちの理論に背くようなテキストを詳細に検討することによって、この見解を補強し、モデルを精緻化してみようと思う。
(AR, p.139)

〈物語読者のメンバーとして〉経験を〈共有する〉というイメージとは、既に検討した(山元, 2002)、アリス・ウォーカーの「日用品」という短編小説を題材に為されて営まれた話し合いで求められていたものである。「日用品」における三人の登場人物について物語読者として考えたことや感じたことを交流することで、あの話し合いの参加者たちは〈作者側の読者〉となりえた、とスミスは記している。そしてそのことが、各人の読みの経験の〈共有〉に結びつくとしていた。しかし、それは「日用品」というテキストに固有の出来事だったのではないかというのがラビノヴィッツの

呈する疑問である。

6.1. ネラ・ラーセンの『パッシング』と修辭的パッシング

この問いを考えるために、ラビノヴィッツは〈1992年秋〉に、〈文学と倫理学〉というコースでネラ・ラーセンの1929年の小説『パッシング』(Larsen, 1929)を教えた経験をもとにして、〈修辭的パッシング〉という問題を取り上げている。

〈パッシング (passing)〉とは「社会的に認められる存在として通用するために自分自身の秘密を隠して振舞うこと」である。ラーセンの『パッシング』は、白人と黒人との間に生まれた混血の女性が白人社会で生き延びるために人種的な〈パッシング〉を行う小説であると一応は捉えることができる。だが、ラビノヴィッツはこの小説が必ずしも人種的な〈パッシング〉を行う登場人物の葛藤を描いただけのものではないところに着眼した。それゆえ、〈自分の学生たちが読む際にどれほど注意不足かということに自覚させること〉と〈人種差別を同性愛者差別以上に重く見てしまいがちな学生たちの自己満足のリベラリズムを取り除くこと〉という〈二重の目的〉(AR, p.139)を持っていた彼は、〈文学と倫理学〉コースの教材として『パッシング』を選び取ったのであった。

山下昇(2000)は『パッシング』について次のように述べている。

3人の混血女性のパッシングを対照させることによって、パッシングの社会的機能の多様性を比較する。とりわけ結婚および出産によって黒人であることが暴露されるかも知れないという女たちの不安を皮肉な視点から描き出す。なかでも深刻なのはクレアの場合である。夫が人種差別主義者であることが分かり、内部から結婚が崩壊していくなかで、彼女はかえって大胆になる。

クレアのアイリーンに対する、あるいはアイリーンのクレアに対する気持ちには、愛憎の交差するアムビヴァレントなものがあり、同性愛的なものを読み取ることも不可能ではない。これをどう解釈するかによって結末の解釈も大きく変わってくるであろう。(山下昇, 2000, p.167)

言うなれば、学生たちが『パッシング』を読んで、山下の言う登場人物間の〈愛憎の交差するアムビヴァレントなもの〉や〈同性愛的なもの〉を読み取れるか否かということが、ラビノヴィッツの言う〈二重の目的〉がかなうかどうかの分かれ目であると言えるだろう。

ラビノヴィッツの場合重要なのは、この小説を物語

内容レベルで混血女性のパッシングという行為を扱ったものだと考えるのではなく、作者が物語言説レベルでのパッシングを試みたテキストであると捉えている点である。このことを彼は〈修辭的パッシング〉と呼ぶ(AR, p.141)。

6.2. 〈明敏な作者側の読者〉と〈だまされやすい作者側の読者〉と

ラビノヴィッツの述べるところから従えば、〈修辭的パッシング〉は次の二つの特徴を持つという。

(1) 〈修辭的パッシング〉は J. L. オースティンの発話行為理論に言う〈行為遂行的発話 (a performativ)〉すなわち〈それを述べることで何ごとかを為す〉ような発話である (Austin, 1955/1975; 坂本百大訳, 1978)。このため、〈事実確認的発話 (constatives)〉とは違って、〈行為遂行的発話〉の場合は発話者の〈意図〉が重要な意味を持つことになる。

(2) 〈修辭的パッシング〉は唯一の読者に関与するのではなく、〈想定され、意図された、必ず必要な二つのターゲット〉としての〈二人の異なった作者側の読者〉に関与することになる。つまり、テキストを理解するために必要なテキストや情報について無知な読者(だまされやすい作者側の読者)と、そのような情報について知悉しているばかりでなく、〈だまされやすい作者側の読者〉の無知を楽しみさえするような読者(明敏な作者側の読者)である (AR, p.142)。

それゆえ、『パッシング』という小説を、その物語内容を中心にして読み取り、登場人物たちのパッシングに纏わる様々な葛藤を読み取るというかたちで事実確認的に読み終えることもできるだろうし、それだけで人種的パッシングを扱った小説であり、いわれのない人種差別に対する反感を書いた小説であるという意味づけることもできる。が、そのような意味づけをして『パッシング』を読み終えてしまうということは、ラビノヴィッツのいう〈二重の目的〉を果たすことにならないし、また山下の言う〈アムビヴァレントなもの〉や〈同性愛的なもの〉を捉えることにならない。それは〈だまされやすい作者側の読者〉を演ずることに過ぎない、というのがラビノヴィッツの考えである。

では〈明敏な作者側の読者〉として振舞うにはどうしたらよいのか。『読者に権限をもたらず』の第8章を読む限り、このことについては、明確な答えをラビノヴィッツ自身が用意していないように思われる。いや、そもそも明確には述べることのできないことだからなのである。明確に〈明敏な作者側の読者〉の読みを描き出したその瞬間から、その〈明敏な〉読者は〈だまされやすい〉読者へと転じてしまうからである。私

たちは『パッシング』を読む間、〈だまされやすい〉状態にあることに甘んじなければならない。

6.3. フラジャイルな(弱い)テキストの修辭学

読むためにこうしたことが求められる『パッシング』のようなテキストを、ラビノヴィッツは〈フラジャイルな (fragile)〉テキストと呼ぶ (AR, p.145)。フラジャイルなテキストとは〈その行為遂行のために、そのテキストについて最もよく知っている存在が共謀して沈黙することを必要とするテキスト〉である。厄介で扱いにくいテキストのようにも思われるが、ラビノヴィッツがこのようなテキストを議論の対象としたのは、他でもなく、既存の〈読み〉に対する考え方への異議申し立てのためでもあった。

ラビノヴィッツが問題にするのは〈マッチョのテキスト説〉と彼が呼ぶものである。これは〈重要なテキストとは、そのテキストを吟味するあいだに、批判的なまなざしで徹底的な分析を行うのに耐えうるほどタフなものである、という信念〉と〈フラジャイルなものと思見されるテキスト群は劣位に置かれたジャンルに属しており、おそらくどのようなやり方でどのような意味にでも読まれる価値のあるものだ、という確信〉によって成り立つものである (AR, p.146)。『パッシング』のようなテキストをこの〈マッチョのテキスト説〉に従って読むと、作者側が物語言説に暗黙のうちに仕掛けた思いを捉えないだけではなく、作者の意思に反した解釈でテキストを片付けてしまうような、書き手に対するレスペクトを著しく欠いた営みになってしまう。

たとえば、ラビノヴィッツは『パッシング』とは対照的なテキストとして、ミッキー・スピレインの『裁くのは俺だ』やレイモンド・チャンドラーの『大なる眠り』といった推理小説を取り上げている。こうした小説の場合、結末まで読むことでテキストの〈フラジリティ (fragility; 弱さ)〉が少しずつ消えてしまうことになり、読者は読む過程を通じて、〈だまされやすい状態〉から〈明敏な状態〉へと変えられていくことになる。これは、推理小説を結末まで読み通すという経験をしたことのある者であれば、容易に想像がつく事態である。

しかし、ラビノヴィッツが取り上げたラーセンの『パッシング』はそうではなくて、〈たとえ読み終わったとしても、そのフラジリティ (おそらく読み終わる前よりもさらに強いフラジリティ) はそのままである。この小説は、その結末を過ぎてなお、多彩な読者たちに崩れやすく不安定な立場 (delicate positionings) をとらせ続ける〉ことになる。

では、そのようなフラジイルなテキストを読む価値はどこにあるのだろうか。一言で言うならある種の理論的立場はある種のテキストにはそぐわない可能性があること〈を私たちに教えてくれるのである。フラジイルなテキストの機能をそのような理論的立場が明らかにしないから無用だというのではない。むしろ逆である。フラジイルなテキストの機能をあまりにも明るみに出しすぎるから（つまりテキストを〈メタ切り〉にしてしまうから）、かえって大切なことが見えなくなってしまう、ということをラビノヴィッツは言っているのである。

『パッシング』を読むことに関するラビノヴィッツの議論が私たちに思い出させてくれることは他にもある。とりわけ教室での授業を考える場合に重要なのは、彼の議論が〈いかなるテキストもすべての読者（作者側の読者の全員ですらも）を同じ立場にするわけではないということ〉を思い出させてくれるということである。〈ある生徒に小説の鍵を与えることによって、私たちは同じクラスの他の生徒が抱いたに違いない価値をその小説から消し去ってしまうかもしれない〉とラビノヴィッツは言う（AR, p.148）。つまり、私たちが堅固で有効だと考える読みの理論は、例外なくある限界の内でのみ堅固で有効なのだから、そのことを承知しなければならないということである。

たとえある理論にしたがって読みの実践を行うことができるとしても、その理論にしたがうことのできない〈だまされやすい〉読者、理解のむずかしい読者のことを考慮のうちに入れる必要があり、実は読みをまっとうできていると思っている自分もまた〈だまされやすい〉一面を持つのではないかと考える必要があるということ、ラビノヴィッツは強調しているのだ。

6.4. テキストのフラジリティと読者側の葛藤

最後にラビノヴィッツの挙げる一例を検討してみよう。

彼は大学の文学理論コースで、グロリア・アンザルデュア（Gloria Anzaldua）の『ボーダーランズ（Borderlands）』を教えた際の経験についても取り上げている。『ボーダーランズ』は英語をベースにして、スペイン語、北メキシコ方言、ナクワン族の言葉など、複数の言語を混在させたかたちで書かれたテキストである。非英語の部分は、英語しかわからない者にとってはそのままでは了解不能で、英語に翻訳してしまうと、その意味の大切なところが抜け落ちてしまう。そういう意味で翻訳不能のテキストであると言ってよい。つまり、英語に翻訳してしまうと、このテキストのフラジリティは消え去ってしまうが、そのとき

このテキストを読むという経験は、もとのテキストを読む経験とはまったく別物になってしまう。というよりも、無価値な営みになってしまうのだ。ラビノヴィッツは言う。〈英語でない素材のいくつかは翻訳されているが、ほとんどはそのままである。たぶん、誰かに翻訳をお願いして、それをクラスの人々に教えるということもやればやれたであろう。確かにそうすれば、スペイン語について何も知らなくても、この本の内容はよくわかったのかもしれない。だが、そうした方法をとれば、明らかにそうした方法による領有（appropriation）に対する抵抗を構築した一つのテキストを、まさしく領有しようとするようになっただろう。実際、『ボーダーランズ』が私のクラスにもたらした様々な価値の中で特に重要なのは、それを読むことでスペイン語話者の学生たちが元気を出したということなのである。〉

スペイン語話者ではない一人の学生は次のように書いたという。

この本は単に素晴らしい本であるというだけでなく、今も続いている排斥について私が理解し始めるきっかけをくれたと思います。私はスペイン語を読めないから、スペイン語で書かれた部分については蚊帳の外に置かれたようなものだったけど、それはチカノス（訳注：メキシコ系アメリカ人）やメキシコ人たちがどんな風を感じているのか…つまり…私たちが何でも英語でしゃべっていて、そのとき彼らが妙なアクセントでしゃべったり、文法的に間違ったりしたら、私たちは耳を貸さない。そのときに彼らが感じていることと同じなんです。私は…この本のスペイン語で書かれた部分を理解しようとは思いません。彼女は彼女が望んでいることを理解できる人々や実際に理解している人々に向けて、この部分を書いたのです。（AR, p.150）

この学生はラビノヴィッツがあえて非英語の部分の翻訳せずに授業を進めたことの意図にかなり正確に答えている。通常は英語を主として進められる大学の文学理論コースにおいて、『ボーダーランズ』というテキストを読むことは、日常的な関係を逆転させる働きをした。英語話者の学生たちは、少なくとも『ボーダーランズ』を読んでいるあいだ、日常の授業のなかでスペイン語話者である〈チカノスやメキシコ人たち〉がどのような思いを抱きながら英語で書かれたテキストを読み、授業に参加しているのか、ということに思いをはせることができたのである。ここでは、〈だまされやすい〉状態と〈明敏な〉状態が転倒しているということに意味がある。

フラジリティを消滅させて、テキストの読みをわか

りやすい状態にしていくことだけが読みの行き着くところではないのだ、ということラビノヴィッツの議論は私たちに銘記させる。むしろ、フラジリティが減じたところにあられるのは〈明敏な作者側の読者〉だけである。そのような場合には、読者の側に価値の葛藤は起こりにくい。むしろ〈だまされやすい作者側の読者〉と〈明敏な作者側の読者〉との間を行き来し、何らかの〈変換〉を行う経験をするのが、テキストのフラジリティによって読者にもたらされるものなのである。

ラビノヴィッツの議論は、決して特別なテキストの読みに限られたことではないように思われる。私たちが日常的に国語科の教室で教材としてとりあげるさまざまなテキストの読みにあてはめて考えることができるだろう。重要なのはフラジリなテキストとはどのようなものか、ということではなくて、テキストのフラジリティとその扱いに私たちがどれほど敏感であるかということであるように思われる。

7. 考察のまとめ

7.1. 〈作者側の読者〉概念の有用性

ラビノヴィッツの言う〈作者側の読者〉という概念は、もちろん作者その人について多くのことを知っている読者を指しているのではない。テキストを書く際に作者が想定する読者像のことであり、これを読者側から言うなら、あるテキストを読む場合に想定するそのテキストを構成した存在である。

これは物語論のなかでとくに「当該物語の構成素性によっては規定できず、むしろコンテキストの機能」である「物語の要点 (point)」(プリンス, 遠藤健一訳, 1996, p.184) をめぐる議論の文脈のなかで発生してきた概念である。そしてこのことは「物語性 (narrativity)」をどのように考えるのか、という問題をも提起する。

「物語性」を「当該物語の構成素性」によっては規定することができず、むしろ「受け手依存」のものとして考えていこうとすると、どうしてもラビノヴィッツの言う〈物語読者〉だけでは不十分であり、「コンテキストの機能」である〈作者側の読者〉という概念が必要になってくる。

読むという行為を語用論的な枠組みで考えながら、小説の教材価値を考えていこうとすると、ラビノヴィッツの言う〈作者側の読者〉と〈物語読者〉との葛藤の様態を明らかにしていくことが有益な作業になるのである。

7.2. 実際の読者と〈作者側の読者〉〈物語読者〉の三極性

これは、実際の読者の読書行為が当該読者による〈作者側の読者〉と〈物語読者〉の二重性を意識した活動であるということの意味する。物語論研究のなかで議論されている「物語性」(プリンス, 遠藤健一訳, 1996) や「テキスト性 (textuality)」(オニール, 遠藤健一監訳, 2001) を、読書行為のなかでいかに生成させていくかということは、国語の授業における小説教材の読みにおいても非常に大切な問題であるが、その鍵となるのは、授業において、実際の読者と〈作者側の読者〉と〈物語読者〉とが為す三極性を、実際の読者の意識のなかであきらかにすることである。

ラビノヴィッツとスミスの議論が教えるところにしたがうならば、とりわけ実際の読者の意識のなかで〈作者側の読者〉と〈物語読者〉の葛藤が営まれないときに、山元 (2002) においても論じた〈ドンキホーテ的〉〈エンマ・ボヴァリー的〉〈プリンパー主義的〉なそれぞれの〈誤読〉が生じるということになる。

それゆえ、物語や小説を教材とする読むことの学習を営んでいく際に、実際の読者と〈作者側の読者〉と〈物語読者〉とが為す三極を意識していく必要がある。スミスによる「神童の挫折」と「日用品」の討議セッションの分析 (山元 (2003) 参照) が教えるように、いわゆる小説教材をめぐる話し合い活動も、参加者の「個人的経験」の吐露をのみ重視するのではなくて、むしろテキストの読みのなかで各人が営んだ〈作者側の読者〉としての読みと〈物語読者〉としての読みを引き出しながら、そのことと〈個人的経験〉とのかかわりを探っていくことが、むしろ話し合うことの価値を高めることになるのである。

7.3. テキストのフラジリティ (弱さ) を生かした実践へ

本稿の6に論じた「フラジリなテキスト」としての『パッシング』の読みについての議論も、文学教材の解釈とその学習の開発について多くのことを教える。もちろんテキストの「フラジリティ」をかくかくしかじかのものでして確定することは困難である。が、知らず知らずのうちに、ラビノヴィッツ言う、〈重要なテキストとは、そのテキストを吟味するあいだに、批判的なまなざしで徹底的な分析を行うのに耐えうるほどタフなものである、という信念〉と〈フラジリなものに見なされるテキスト群は劣位に置かれたジャンルに属しており、おそらくどのようなやり方でどのような意味にでも読まれる価値のあるものだ、という確信〉を、私たちがまた強く抱いているのではないだ

ろうか。

教材解釈の〈明敏さ〉は大切なことだが、〈明敏な作者側の読者〉になろうとすることによって、小説表現の細部を見落としていくということも十分にありうることであるし、また、スミスが内省的に検討した『アラバマ物語』実践にみられたように、教師の教材解釈における強い確信が、考えておかなくてはならない大切な問題を逆に見えにくくする事態もありうるだろう。テキストのフラジリティに対する配慮が、小説教材に対して多様な読者が営む〈作者側の読者〉と〈物語読者〉とのあいだの葛藤を理解する大きな力となるのである。

【文 献】

- オースティン, J. L. (1955/1975 : 1978), 坂本百大訳, 『言語と行為』, 大修館書店.
- オニール, パトリック (2001), 遠藤健一監訳, 『言説のフィクション—ポストモダンのナラトロジー—』, 松柏社.
- スピレイン, ミッキー (1976), 中田耕治訳, 『裁くのは俺だ』, ハヤカワ文庫.
- タン, エイミ (1989 ; 1990) 小沢瑞穂訳, 「神童の挫折」, エイミ・タン『ジョイ・ラック・クラブ』所収, 角川書店.
- チャンドラー, レイモンド (1959), 双葉十三郎訳, 『大いなる眠り』, 創元推理文庫.
- ディケンズ, チャールズ (2000), 田村洋子訳, 『ドンビー父子』, こびあん書房.
- プリンス, ジェラルド (1996), 遠藤健一訳, 『物語論の位相』, 松柏社.
- 山下昇 (2000) 「ネラ・ラーセン」, 加藤恒彦・北島義信・山本伸編著『世界の黒人文学—アフリカ・カリブ・アメリカ』, 鷹書房弓プレス.
- 山元隆春 (2002) 「小説教材の読みにおける〈作者側の読者〉と〈物語読者〉の対話・葛藤(1)—ラビノヴィッツとスミス共著『読者に権限をもたらず』における読者概念の検討—」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第二部, 第51号, pp.91-100.

リー, ハーパー (1960) 菊地重三朗訳, 『アラバマ物語』, 暮らしの手帖社.

- Applebee, Arthur N. (1989) *A study of book-length work taught in high school English courses*. Albany, NY: Center for the Learning and Teaching of Literature.
- Anzaldúa, Gloria. (1987) *Borderlands/ La frontera: The new mestiza*. Aunt Lute Books.
- Larsen, Nella. (1929/1997) *Passing*. Penguin.
- Phelan, James. (1989) *Reading People, Reading Plots: Character, Progression and the Interpretation of Narration*. The University Chicago Press.
- Probst, Robert. (1992) "Five kinds of literary knowing," in J.Langer(Ed.), *Literature instruction: A focus on student response*, National Council of Teachers of English, pp.54-77.
- Rabinowitz, Peter J. (1987) *Before Reading: Narrative conventions and the politics of interpretation*, Cornell University Press.
- Rabinowitz, Peter J. & Smith, Michael W. (1997) *Authorizing Readers: Resistance and Respect in the Teaching of Literature*, NCTE and Teachers College Press.
- Smith, Michael W. (1991) *Understanding Unreliable Narrators: Reading between the Lines in the Literature Classroom*, NCTE.
- Walker, Alice. (1973/1977) "Everyday Use," in *Stories by Alice Walker*, Longman, pp.77-90.

付記 本稿は、2002年5月26日に筑波大学学校教育部（東京都文京区）で開催された第102回全国大学国語教育学会における自由研究発表「読みの理論と文学教育実践との関係に関する一考察—Rabinowitz & Smith 共著 *Authorizing Readers* (1997) を手がかりとして—」の内容をもとに、大幅に加筆・修正を行ったものである。学会の席上では、横山信幸氏・須貝千里氏・鶴田清司氏・住田勝氏にご質問・ご助言を賜った。記して感謝申し上げる次第である。